

全国の小・中学校へ名画の複製画を供給し、子どもたちの情操教育をサポートする。

40年前、「学校美術館運動」が起こり、日本の小中学校で数万点の名画の複製画が購入され、あるいは寄贈された。経年劣化が激しく交換時期にあるが、ゆとりのない社会状況のため着手できない学校も多い。NPO法人美術教育支援協会は子どもたちの健全育成のため、この運動を支援している。

全国の小中学校にある複製画は交換時期にきている。

今、日本中のほとんどの小中学校に、レオナルド・ダ・ヴィンチやゴッホなどの名画が飾られている。学校が独自に購入したものもあるが、企業などが文化支援事業として寄付してきたものもある。しかし、すでに老朽化し鑑賞に耐えない状態の作品も増えてきた。

NPO法人美術教育支援協会 理事 箕島紘一さんは、

その現状について次のように語る。

「昭和48年にモナ・リザが日本に来たのを契機に学校美術館運動が始まり、以前は企業が積極的に活動されていたのですが、バブル崩壊以降は、文化的事業は行われなくなってしまいました。40年も前に贈られたものは耐光性もなく傷みも多いため、交換時期に来ているのですが、学校の予算も切り詰められるなかで思うように進んでいません」

数学や英語などの受験科目に比べて、美術や音楽などの情操教育の予算は縮小傾向にあるという。

そこで、箕島さんらが美術に関する教育支援を行うため5年前に立ち上げたのが、NPO法人美術教育支援協会である。寄付や助成金を頼りに小・中学生を対象とした、名画の複製画を集めた絵画展の開催や毎年200校への複製画の交換や寄贈を目指している。



小・中学校に対して、複製画の寄贈を行っている。写真は教育施設のポティチェルリの絵画



中学生を招待し開催した「世界の名画展」の様子



複製画ではあるが、名画を鑑賞できる貴重な機会となった

「音楽の授業では音楽鑑賞というのがありますが、美術で名画を鑑賞することはほとんどありません。子どもたちが美術作品に触れる機会が少ないのは、不幸だと思っています。深く学ぶ必要はありません。なんとなく目に触れて、何か子どもたちが感じてくれればよいと考えています」

実は同協会には大きな強みがある。ルーブル美術館など世界各地の美術館と交渉し、強いパイプを築いていることである。コンテンツビジネス花盛りの現代では、拒否されるか途方もない契約金を支払わなければならないが、コストを抑えて教育現場に名画を送ることができる。

今の流行はフェルメール。時代とともに求められる名画も変わる。

40年の間には技術的な進歩もあった。通常の絵画用キャンバスは麻を編み込んだものだが、同協会のキャンバスは化学繊維を使い、強度が格段に高まり、大型の作品でも複製ができるという。デジタル技術も進み、インクジェットプリントとあわせて、高品質の複製もできるようになっている。ある学校の講堂に納めたラファエロの『アテネの学堂』は2m×3mもある。キャンバス地には凹凸があり、複製画は写真とは違い本物に近い質感を表現できるといふ。

担当者より



今後も名画を鑑賞できる環境を整えたいと思います。

NPO法人美術教育支援協会
理事
箕島紘一さん

一企業ではできない事業ですので、AJOSCの助成には心より感謝しております。名画に触れた子どもたちが、いつの日か世界の美術館で本物を見たとき、思い出とともに感動を新たにすることを夢んでいます。今後もご支援をよろしくお願いたします。

「複製といても子どもたちが鑑賞するうえでは十分な品質です。そもそも日本の浮世絵は版画ですから、全て複製です。名画の複製は日本がルーツだといってもいいでしょう」と箕島さんは笑う。

少子化が進み、学校では使われない教室が増えてきている。そこを改造して美術館として公開している学校も増えてきた。40年前に「学校美術館運動」の目標として描いていたことが、予想外の形で実現しつつある。

一番人気の名画は相変わらず『モナ・リザ』だが、最近ではフェルメールをオーダーする学校も増えてきた。光の魔術師と言われるフェルメールの作風に、癒しを感じる人も多い。

「時代とともに求められる名画も変わるのでしょね。子どもたちでさえ不安になりがちな昨今ですから、時代を元気に生き残るためにも、感受性の豊かなうちにいろいろな情感をもつ名画に触れてもらいたいと思っています」

AJOSCが支援した2010年度は、北海道の小中学校には移動美術館として十数点を納めた。各校を巡回して鑑賞してもらった。また東日本大震災の被災地の学校へも寄贈した。最終的な数字はまだでていないが、目標に近いところまでの実績を残した。今年度以降も、全国の小学校へ新しい名画を届けていく予定だ。